**秋本　啄果 （あきもと・たくか）**

**１、プロフィール**

大正15年青山哀囚主宰「草日社」に参加する。「黎明」「座標」「樹氷」に参加。哀囚亡きあと、七戸短歌会を結成するなど、七戸における文学活動の中心人物であった。

＜生没＞

1905（明治38）年８月23日 ～ 1989（平成元）年３月27日

＜代表作＞

 　歌集『独り歌へる』『草日』

＜青森との関わり＞

七戸町に生まれる。七戸短歌会を結成するなど地元の短歌界発展の礎を築いた。

**２、作家解説**

明治38年８月23日、七戸町に生まれる。生家は絹糸工場を経営していた旧家であった。明治45年七戸町立七戸尋常小学校に入学、大正７年には高等科に進んだ。高等科在学中の大正９年、「地上」の同人工藤祐司の添削を受け、本格的な歌作に入る。同10年淡谷悠藏らの「黎明」に参加、生活派の口語歌に転ずる。同15年青山哀囚の主宰する草日社に参加。また昭和５年には「座標」に口語歌を発表。同７年に七戸短歌会を結成。７年７月に歌集『独り歌へる』を出版。８年、船水公明主宰の「樹氷」に同人として参加、文語歌を作る。24年に山峡社、27年に七戸群青短歌会、31年に上北文学社、39年に第二次群青短歌会、50年には七戸文学会結成と機関誌発行に終始協力した啄果は、七戸における文学活動の中心的存在であった。53年歌集『草日』出版。

 　代表作

 　遥けき日少年われに「若菜集」読みてきかせし次兄（あに）も世になし

　おじろ鷲オオセッカ棲むこの秘境鷹架沼は亡妻（つま）のふる郷

**３、資料紹介**

〇歌集『草日』

図書

1978（昭和53）年４月１日

188mm×133mm

第２歌集。大正15年から昭和52年までの歌が収められている。この間に母、兄、妻が生涯を閉じている。淡谷悠藏の序文、杉山勲の口絵、和田四郎の解説など、啄果生涯の短歌活動の軌跡を浮彫にした記念碑である。